多民族国家マレーシアの色彩

三 星 宗 雄

キーワード：色，色彩，マレーシア，マラッカ，モスク，熱帯

はじめに

2014 年 3 月 8 日マレーシア航空のクアラルンプール発北京行 MH370 便が行方不明になった。6 月 28 日現在機体はまだ発見されていない。筆者らがマレーシアに向かったのは 2 日後の 10 日であった。事故直後なので，逆に安心というあまり根拠のない確信に支えられ，それほど気にならなかった。

マレーシアは典型的な多民族国家で，主にインド系（1 割），中国系（3 割）そしてマレー系（6 割）から成る。国教はイスラム教，国語はマレーシア語である。筆者には街中のビル群中にモスクが見られたり，モスクと仏教寺院が同じ視野の中にある光景は非常に新鮮であった。図 1a と 1b はクアラルンプールのホテルから見た仏教寺院とモスクである。ほとんど隣り合って建っている。

そうした多民族が共生するこの国でその多民族性が色彩文化のどのような面に表れているのか。そこには各文化に根づいた色彩，いわば色彩のローカリゼーション，とそれぞれの文化を超えた色彩のグローバリゼーションとがあるはずに違いない。その見極めをしたいというのが主要な目的であった。

ただしこの種のフィールドワークのための分析手法が確立されているわけではないので，今回も何か写真の羅列になってしまった感がある。しかし将来の景観または色彩景観の分析のために，ぜひカラー刷りの本号に記録としてとどめておきたいと思うのである。

「色彩の地理学」の創始者，J.P. ランクロは言う。「たとえば比較文学のように色を比較することです。……自分の個性的な色を認識することはむずかしく，比較したり，対照的なもの，相違を認めた時

図 1a　ホテルから見た仏教寺院

図 1b　同　モスク

図 2　ホテルから見たクアラルンプール市の街並み

はじめて見えてくるもの……」（ランクロ，2001；三星，2014）。まずは色彩の材料を集め，比較することであろうか。

1．クアラルンプール

マレーシアは熱帯の国である。首都クアラルンプールも北緯約 5° に位置する。暑いに違いはなかったが，昨年 12 月に行ったタイに比べてそれほどでもなかった。日本の厳冬の 12 月と春の 3 月とでは体感温度が異なるのかも知れない。

熱帯マレーシアの第一印象は，文化があるということであった。10 数年前に訪れた熱帯アマゾンと比較し，文字通り濃密な文化の香りを感じた。土台比較する場所が間違っているといわれるかも知れないが，同じ熱帯でもこれほど違いがあるのかと驚いた。その 1 つの要因は寺院やモスクの存在ではないだろうか。文化の醸造には何か精神的なものが必要なのであろう。

マレーシアの首都クアラルンプール市は近代的な街である（図 2）。高層ビルが立ち並び，建設中のビルも多い。

（1）建築物

図 3 は郵便局である。マレーシア国旗の 4 色の中の赤と青が特徴的である。ちなみに国営（と思われる）機関の建築物やストリートファニチュアにはこれら 2 色が用いられているように思われる（図 24）。これらはいわば色彩のローカリゼーションである。

図 4，5 に見られるようにマレーシア（またはクアラルンプール）の街の色彩はやや暗い赤と黄色の 2 色によって調整されているように思われる（国立博物館および政府系機関の建物へのゲート）。図 6 の高層マンションにもその取り組みが感じられる。こうした配色は（亜）熱帯地域にしばしば見られる。ヤシなどの常緑樹と混じり合い，独特の景観を形成する。これらの色づかいもローカリゼーションの表れと考えることができるであろうか。

図 3　郵便局

図 4　国立博物館

図 5　政府系機関の建物へのゲート

図 6　高層マンション

図 7　街中のモスク（1）

図 8　街中のモスク（2）

図 7 と 8 は街中に見られるモスクである。幾何学模様が美しい。屋根に上記の鈍い赤色をいただいている。市内にある国立モスクの受付嬢は東京にモスクがあることを知っていた。図 9 は国立モスクの礼拝所の中である。広い，現代的な建築である。

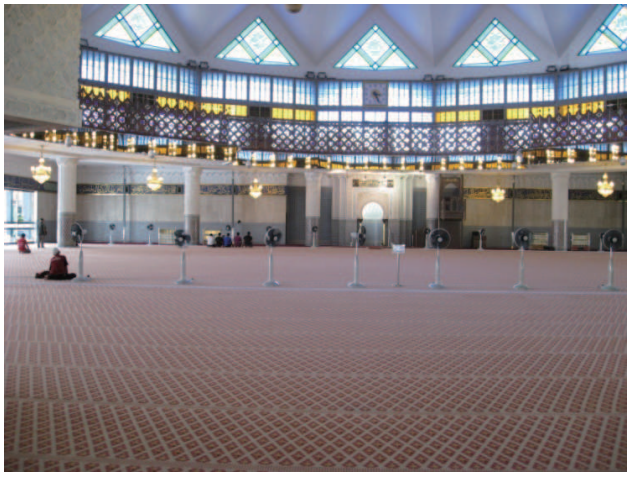

図 9　国立モスクの礼拝所

図 10　街の建物

図 10 は街で見かけた建築（おそらく店）である。色彩はともかく窓の高さが見事に一致しているのは驚かされる。

（2）公共輸送機関

タクシーは全車が図 11 のようなツートンカラーではないが，明らかに調整が行われていることが分かる。ちなみに 2 日後に出かけたマラッカ市のタクシーは白と黒であった。すなわち日本のパトカーであった。

図 11　タクシー

図 12　コンビニ

（3）コンビニエンスストア／ファストフード

セブンイレブンの色彩に関してはわが国とさほど変わらない（図 12）。

図 13　マクドナルド店（1）

図 14　マクドナルド店（2）

図 14 のマクドナルド店は鉄道のターミナルの玄関に近い場所にあり，そのため周辺の環境に配慮した色彩にする必要があることは理解できる。しかし他に類例を見ない，非常にユニークな色彩となっている。

しかし街中のマクドナルド店でも赤色（および黄色）は抑制され，無彩色の看板である（すべてではない）（図 13）。こうした点にも熱帯国家マレーシアの文化の香りを感ずるのである。筆者は以前色彩への感性は「西高東低」または「南高北低」であるとした（三星，2014）。その論理では熱帯において最高となる。またほんの少し垣間見たばかりなので速断できないが，その雰囲気は感じられる。

（5）自販機

マレーシアでは案外自販機を多く見た。図 15 は国立博物館の敷地内のものである。単独でポツンと立っているのは，周囲の環境の文脈に合わないので好ましくないと思われるが（三星，2014），しかし筆者にはボディの色彩が真赤ではなく，オレンジ色であることにこの都市の色彩環境への配慮を感じるのである。また柱の横のオレンジ色の空きビン・ペットボトル入れと同系色であるのも何かつながりを感じさせる（もう少し色が近づくと申し分ないのだが）。

図 15　自販機

（6）トイレマーク

図 16　トイレマーク（1）

図 17　トイレマーク（2）

図 18　トイレマーク（3）

図 19　トイレマーク（4）

図 20a　トイレマーク（5）

図 20b　トイレマーク（6）

図 21a　トイレマーク（7）

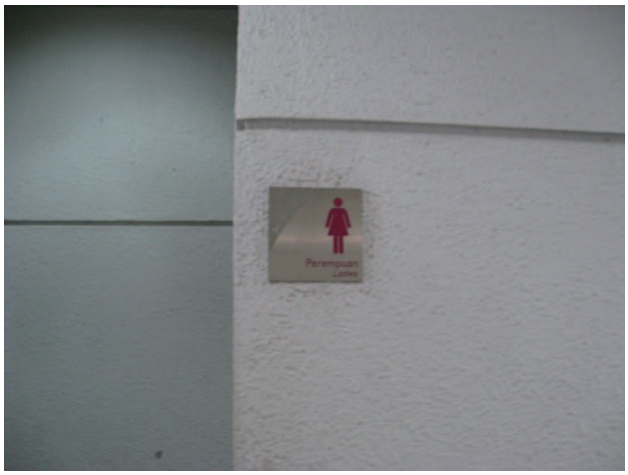

図 21b　トイレマーク（8）

マレーシアのトイレマークは，男女で色彩の区別がない，という点でグローバリゼーションの線上にある。これらのトイレマークは国立博物館（図 16 ～ 18）や国立モスク（図 19 ～ 21b）といった特殊な場所でのものだが，駅やホテル内で見かけたマークもみな同じである。マークそのものも概して小さく，ある種の配慮を感じざるを得ない。

また屋外においては男女で同色とし，トイレの内部で色分けをするという仕掛けもある（図 18）。筆者は以前韓国の釜山空港のトイレで見た時，マークの色彩を統一することのメリットとデメリットを統合する新しい手法のように思われた（三星，2014）。わが国では，少なくとも筆者には，あまり見る機会のない試みである。

（7）案内／ファッションに見る多民族性

図 22（a ～ c）はイスラムアート美術館の案内である。それぞれマレー系向け，インド系向け，中国系向けと思われるが，直接的にはインド産のアート，マレー産のアート，中国産のアートを意味している。

図 22a　美術案内（マレー系向け）

図 22b　美術案内（インド系向け）

どの色をどの国に割り当てるかは難しい問題だが，図 22a の緑色の案内はイスラム教を意味していると思われるのでマレー系用としてうなづけるが，インドは赤，中国は水色というのはどうだろうか。イメージ的には逆のような気がしないわけではないが，それは案外型にはまった思考なのかも知れない。中国産の出展物は磁器（青磁）が多かったので，そのイメージに合わせているともいえる。また確かにヒンドゥー教の寺院は多くが極彩色である。

クアラルンプール市や次に訪れたマラッカ市では，インド系の市民は白を基調とする無彩色の衣服が特徴的であった（少なくとも男性は）。マラッカ市のタクシーの運転手はインド系が多く，奇しくもタクシーの色そのものも白と黒のツートンカラーであった。またタクシーの運転手が，これはわれわれヒンドゥーのモスクだ，として紹介してくれたモスクもまた外壁が白に近いほぼ無彩色であった。

図22c　美術案内（中国系向け）

一方ファッションの中の色彩イメージは少し異なるようである。図 23a，23b，23c は国立博物館に飾られていたそれぞれマレー系，インド系，中国系のファッションの色彩イメージである。すべて赤やオレンジ色を中心とした暖色系で占められている。

これらの色彩の細かい違いを指摘することは難しい。しいて特徴づけるとすれば，マレー系ではオレンジ色と黄色が目立つ。他には紫とカーキ（ベージュ）が見える。しかし筆者には中央付近に立つ緑色の少年が気になる。この緑色は上に見た（図 22a）のと同じイスラム教の緑の象徴であろう。ちなみにマレーシアにおける黄色はスルタン（王家）の色である。

インド系のイメージにおいてはオレンジ色に加えてやはり白と黒が見られる。中国系では赤と黄色，そして白であろうか。これらはいずれも女性のファッションイメージであり，男性のファッションイメージは同じではないと思われる。

図23a　マレー系のファッションイメージ

図 23b　インド系のファッションイメージ

図23c　中国系のファッションイメージ

（8）ストリートファニチュア

郵便ポストはわが国と大変似た色使いである（図 24）。図 25 は変圧器であるが，上に述べたようにマレーシア国旗の中の 2 色となっている。両方とも国営（連邦）の会社と思われるが，もしそうだとすれば，国旗の 4 色の中で国（連邦）を意味している青色を，郵便ポストの色彩にも配すれば，国（連邦）の象徴性はより高まるのではないだろうか。

図 26 は沿道のごみ箱である。その色彩には明らかに環境への配慮が感じられる。

図 24　郵便ポスト

図 25　変圧器

図26　ごみ箱

（9）コーラン

筆者には本物のコーランに接するのは今回が初めてであった。イスラム文化の中で緑色が特別に神聖な色であるのは，神によって預言者ムハンマドに示されたコーランが記された板（コーランの原盤）が緑色であったからだ，とする仮説がある（21 世紀研究会，2003）。ここイスラム美術博物館では多くのコーランを見ることができたが，表紙が緑色のものもあったが，そうでないものもあり，仮説は厳密には実証されなかった（図 27a ～ f）。

コーランが意外にカラフルであることに目を見張った。このコーランのカラフルさはいったいどこから来るのか，非常に興味があるところではあるが，これがマレーシア特有のローカル性のものなのか，それともグローバリゼーションの表れなのか，世界のコーランを見たわけではないので，何とも言えない。

図 27a　コーラン（1）

図 27b　コーラン（2）

図 27c　コーラン（3）

図 27d　コーラン（4）

図 27e　コーラン（5）

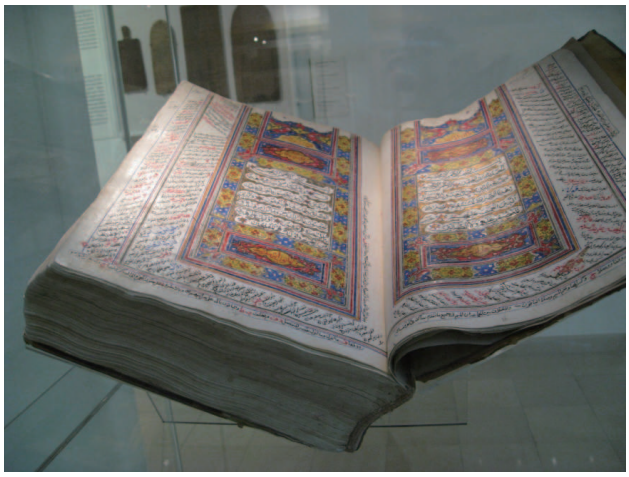

図 27f　コーラン（6）

（10）クアラルンプールのチャイナタウン

クアラルンプールの最後にチャイナタウンの風景を紹介したい（図 28a，b）。一見したところ通り 1 本の規模で，横浜の中華街と比べるとかなり小さい。筆者らが訪れたのは夕方であり，タウンの顔がち

ょうど昼から夜へと切り替わる時刻であった。そのため多くの人たちが屋台作りなどに奔走しており，大変な混雑ぶりであった。

飲食店があまりなく，大部分が普通のショップであることが，横浜の中華街と違う点であった。

図 28a　チャイナタウン（1）

図 28b　チャイナタウン（2）

2．マラッカ

（1）ピンクの街マラッカ

マラッカはクアラルンプールからバスで 2 時間の場所に位置する海峡の街である。あのマラッカ海峡である。またマレーシアの母体となったマラッカ王国の地でもある。

ここで驚くべき色彩を目撃した。それはピンク色の教会である（図 29a）。また街全体が同じ色で統一されていた。博物館やホテルもほぼ同じ色であった（図 29b ～ f）。この色はおそらくこの地域で産出される土に由来するものであろう。しかし他の色の建築物ももちろんあったので，本当のところは分からない。

図29a　ピンクの教会

図 29b　博物館

図 29c　周辺の建物（1）

図 29d　周辺の建物（2）

図 29d　ホテル

図 29e　建築物の屋根

図 29f　博物館のゲート

（2）ファストフード

この地域にあってもマクドナルド店の鮮やかな赤は抜かれていた（図 30）。しかしその隣に，それに匹敵する赤色が見られ，色彩抑制の効果が残念ながら半減してしまっていた。

図 30　ファストフードの看板

(3) 公衆トイレ／トイレマーク

この地域の基調色であるピンクのトイレである（図 31)。トイレマークは男女とも赤色で統一されている。またトイレマークは色そのものは一定ではないが，男女では同じである（図 32a，b，c，d)。

図 31　公衆トイレ

図 32a　トイレマーク

図 32b　トイレマーク

図 32c　トイレマーク

図 32d　トイレマーク

（4）自販機

この自販機の白は，偶然ではなく，環境への配慮の結果と言うべきであろう（図 33）。この街はピンクと白によって色彩の調和を実現しているようである（図 34）。

図 33　自販機

図 34　マラッカ川

3．離島

マラッカ港からボートで約 1 時間の離島に渡った。事前にそこに水上生活者の町があると知っていたからである（図 35a，b）。その離島は中国系の住民の町であった。赤が多用されているのはうなずけるが（図 36），意外に黄色と青が目立った（図 37a，b，c，d）。

この黄色と青がランダムに配色されてるとは思えないが，もう少し多く配されてもいいのではないだろうか。

図 35a　水上生活者の島（1）

図 35b　水上生活者の島（2）

図 36　島内のレストラン

図 37a　町の色彩（1）

図 37b　町の色彩（2）

図 37c　町の色彩（3）

図 37d　町の色彩（4）

離島で，しかも水上生活であれば仕方がないかも知れないが，「桁」の間には生活のごみが大量に捨てられていたのが気がかりであった（図 35b）。環境の思想というようなものはあまり感じられなかった。航海の無事を祈願する心があるのであれば（図 38a，b），もう少し海に感謝する気持ちがあってもいいのではないだろうか。

図 38a　海業豊収寺院（1）

図 38b　海業豊収寺院（2）

引用／参考文献

ベルテルスマン『世界地図帳』，日本版，1999 年，昭文社.
小西裕美（2001）ランクロ教授の色彩世界　講演要旨，日本色彩学会誌 25，1，21-24.
ランクロ J.P.（2001）日本での公開講演に寄せて，日本色彩学会誌 25，1，19-20.
Lenclos J. P.（1989）The Geography of Color（『色彩の地理学』，カースタイリング別冊，三栄書房）.
三星宗雄（2014）『色彩の快：その心理と倫理』，御茶の水書房.
21 世紀研究会編（2003）『色彩の世界地図』，文藝春秋.

The colors of Malaysia, a multi-racial nation

MITSUBOSHI Muneo

Key words: color, Malaysia, Kuala Lumpur, Malacca, Mosque, tropical

Abstract

The author visited KualaLumpur and Malacca in Malaysia from March 10 to 13 to gather data on color there. Malaysia is a country consisting of several different races. It was very interesting to have the view that Buddhist temples and Islamic mosques coexist adjacently.

The major purpose was to find out colors characterized by such multi-racial nationality. The colors of signs of MacDonald's were regulated by removing vivid red color and even yellow both in KualaLumpur and Malacca. The colors of public toilet signs were same for men and women in both areas. The colors of vending machines were co-ordinated with their environment.

In case it is needed to show different contents to different races, the colors red, green and blue were symbolized for Indians, Malayans and Chinese respectively. In fashion, however, colors seemed to be assigned to those races in more subtle way.

The pink church and the buildings surrounding it were characterizing Malacca very strongly.

Finally the pictures of the Korans were shown. Not all of their cover were green, as hypothesized that the sacred color green in the Islam is due to it.